

『方丈記』研究の序章

要旨

『方丈記』は随筆文学として知られているが、その評価は以外に低い。その理由は、分量の少なさ、次に内容が主観的で描写された世界が狭いと把握されているからと言えそう。しかし、分量の少なさが作品の価値を決めるものではなく、また主観的であるとしても、それは、かえって激動の時代、中世の知識人の苦悩を如実に示すものとして、そこに価値を見出すことができるはずである。

そこで、本稿では、『方丈記』全体の構成について明らかにすることを第一の目標とし、その結果、長明の主張を導きだすことを、さらなる目標とし、さらに、できれば『方丈記』の再評価を最終目標としたいと考えた。

『方丈記』(全六章・三七段)の構成は「1、序文(世は無常) ↓ 2、不思議(世の無常の具体例) ↓ 3、人生の苦悩(一般論) ↓ 4、自己の苦悩(個別論) ↓ 5、出家1(大原) ↓ 6、出家2(日野山・方丈の家) ↓ 7、方丈の住処(内部・周辺・近辺・遠地・独夜) ↓ 8、独居の気楽さ(都との比較) ↓ 9、自己の生き方の反省 ↓ 10、後記」と、10項目に分けられる。

土屋 博映

構成上のポイントは、2の「不思議」から、3、4の「人生・自己の苦悩」へと展開する部分である。展開はやや強引だが、見方を変えれば、「不思議」から直接、「方丈の住処の安寧さ」を述べるよりも、彼の、人生における鬱々たる心の暗闇が、3の「人生の苦悩(一般論)」と4の「自己の苦悩(個別論)」により、より深化されているともいえる。5の「出家1」は世の中の「不思議(天変地異)」だけで成しえたものではないということの強い内面の噴出と見られよう。6の「出家2」により、やっと安住の家「方丈の住処」を手に入れたことを述べ、7で「方丈の住処」の内部、外部、周辺から近辺さらに遠地までをとことん賛美する。

鴨長明が『方丈記』で主張したかった点は、7の「三三」「おほかた」で始まる段」と「三三」「それ」で始まる段」で、今の、「方丈」の清貧の住処をよしとし、独居の生活をよしとする、これが一つの主張。そして、「三三三」「おほかた」で始まる段」で、今の純粋な心をのべ、「三四」「それ」で始まる段」で、精神の満足こそ最善であると強調する、これが最終的な主張であると推定した。

一、はじめに

『方丈記』は随筆文学として知られている。随筆文学の系譜としては『枕草子』を嚆矢とし、次にこの『方丈記』、そして『徒然草』が続くというように位置づけられている。しかし、その評価は他の二作品に比し、非常に低いものがある。その理由は、私見として、分量の少なさが第一、次に主観的かつ自己中心的なもの、と、そのように把握されているからと言えそうだ。

しかし、分量の少なさが作品の価値を決めるものではないことは、『奥の細道』を見れば一目瞭然である。また主観的、自己中心であるとしても、それは、かえって激動の時代、中世の知識人の苦悩を如実に示すものとして、そこに価値を見出すことができるはずである。

『枕草子』は、随筆文学というものの、その実態は、宮中、皇族・貴族の生活を描くところに重きがあり、むしろ日記文学に近いとも考えられる。『徒然草』は、自己を客観化しているところはあるものの、有職故実的な要素を多く持っている。同じ随筆文学とは言え、作品個々には、質的に大変な相違があるのである。

『方丈記』は、それら二つに比較すると、非常に自分に素直である。自己の内面を臆面もなくさらけだしている。そういう意味で当時の知識人が、自己の人生、生き方、世の中のあり方などに、どのような執着を持っていたかを明確にうかがい知れる、貴重な作品と評価できるだろう。

その研究の「序章」として、本稿では、『方丈記』全体の構成につい

て、明らかにしてみることが第一の目標とする。どんな構成（構造）を持ち、何を、どのように主張したいのか、という点を、明確にしたいのである。

二、概観

本章では、『方丈記』の全体を概観する。テキストは『方丈記』（角川文庫・築瀬一雄訳注）による。章立て等すべてテキストのままである。

○は土屋の解説。※は土屋の命名。

一（※第一章・序論）

「二」ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と住処と、またかくのごとし。

○冒頭の全文。川の流れ、泡の無常を争う様を「人」と「住処」にたとえている。

「二」玉敷の都のうちに、棟を並べ、薨を争へる、高き、賤しき、人の住ひは、世々を経て、尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或いは去年焼けて、今年造れり。或は大家亡びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も変らず、人

も多かれど、いにしへ見し人は、一三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。○冒頭に続く全文。冒頭を受け、「住処」と「人」の無常を泡にたとえている。

「三」知らず、生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と住処と、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しばみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

○さらに続く全文。「人」と「住処」の無常を露にたとえて、冒頭からのテーマをまとめている。

二(※第二章・世の不思議)

「四」予、ものの心を知れりしより、四十あまりの春秋をおくれる間に、世の不思議を見る事、ややたびたびになりぬ。

○「一(※第一章)」であげた「人」と「住処」の無常を具体的に述べるのが「二(米第二章)」と考えられる。それを長明は「世の不思議」と言っている。ここはその冒頭で、テーマともなっている。

「五」去安元三年四月廿八日かとよ。風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より、火出でて、西北にいたる。はてには、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで一夜のうちに、塵灰となりきに。

○「不思議」の一番目が「安元の大火」である。日時について詳細に記している。

「六」火元は、樋口富の小路とかや。(略)

○以下続く大火の描写は詳しい。「公卿の家十六焼けたり」「男女死ぬるもの数十人」と、「住処」と「人」について詳細に記している。

「七」人のいとなみ、皆愚かなる中に、さしもあやふき今日中の家をつくるとて、宝を費やし、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

○「安元の大火」のまとめの全文。大火を根拠として、「住処」にこだわることに「あぢきなく」とまとめている。

「八」また、治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより、大きな辻風おこりて、六条わたりまで吹ける事侍りき。

○「不思議」の二番目、「辻風」について、冒頭の全文。期日はかなり詳細。「不思議」の二番目からは「また」という接続詞を用いている。

「九」三四町を吹きまくる間に籠れる家ども、大きなも小さきも、ひとつとして、破れざるはなし。(略)

○以下、「辻風」の災害の様子が詳細に述べられる。

「十」辻風はつねに吹くものなれど、かかる事やある。ただ事にあらず。さるべきものさとしかなどぞ、疑ひ侍りし。

○「辻風」のまとめの全文。「ものさとし」とまとめている。

「一二」また、治承四年水無月のころ、にはかに都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。おほかた、この京のはじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり。ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを、よの人安からず憂へあえる、実にことわりにもすぎたり。

○三番目の「不思議」の「都遷り」冒頭全文。ここも「また」を接続詞として用いている。「治承四年水無月」と年月は明確に記される。

「一二」されど、とかく言ふかひなくて、帝より始め奉りて、大臣公卿みな悉く移ろひ給ひぬ。(略)

○以下、都遷りの悲惨な実態が赤裸々に描かれる。「軒を争ひし人のすまひ、日を経つつ荒れゆく」という一文は作品冒頭(※第一章)との関連がある。

「二三」その時、おのづから事の便りありて、津の国の今の京にいたり。(略)

○以下、作者長明が「今の京」を訪れ、見聞したことを詳細に記す。

「二四」伝へ聞く、いにしへの賢き御世には、あはれみもちて、国を治め給ふ。すなはち、殿に茅をふきても、軒をだにととのへず。煙のともしきを見給ふ時は、限りある貢物をさへゆるされき。これ、民を恵み、世を助け給ふによりてなり。今の世の有様、昔になぞらへて知りぬべし。

○「都遷り」のまとめの全文。「昔になぞらへて知りぬべし。」とまとめている。

「二五」また、養和のころとか、久しくなりて、たしかにも覚えず。二年があひだ、世の中飢渴して、あさましき事侍りき。(略)

○四番目の「不思議」の「養和の飢饉」冒頭部分。「あさましき」と評価している。

「二六」これによりて、国国の民、或は地を捨てて境を出で、或は家を忘れて山に住む。(略)

○「飢饉」による世の中の悲惨な様子を記す。

「二七」前の年、かくのごとくからうじて暮れぬ。(略)

○「飢饉」の翌年、世の中の悲惨な様子を詳細に記す。

「二八」また、いとあはれなる事も侍りき。(略)

○「また」という接続詞が使われているが、これは次の「不思議」につながるものではなく、「飢饉」の中の「あはれなる事」を特筆している。

「一九」仁和寺に隆曉法印といふ人、かくしつづ、数も知らず死ぬる事を悲しみて、その首の見ゆることに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。(略)

○「隆曉法印」が「飢饉」の死者を供養し、さらにその死者の数が、「四万二千三百」であったと詳細に記している。

「二〇」崇徳印院の御位の時、長承のころとか、かかる例ありけりと聞けど、その世の有様は知らず。眼のあたり、めづらかなりし事なり。

○「飢饉」のまとめ全文。「めづらかなり」と評価している。

「二一」また、同じところかとよ。おびたたく大地震ふる事侍りき。

(略)

○五番目の「不思議」の冒頭。以下、地震の様子を詳細に記す。

「二二」その中にある武者のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に、小家をつくりて、はかなげなる跡なし事をして、遊び侍りしが、俄かにくづれ、うめられて、跡かたなく、平にうちひさがれて、二つの目など一寸ばかりづつ打ち出だされたるを、父母かかへて、声を惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれに、かなしく見侍りしか。子のかなしみには、たけきものも恥を忘れけりと覚えて、いとほしく、ことわりかなとぞ見侍りし。

○「幼児」を亡くした両親の悲しみを描いた全文。「二つの目など一寸ばかりづつ打ち出だされたる」は、写実的であり、リアリティがある。

「二三」かくおびたたく震る事は、しばしにて止みにしかども、そのなごり、しばしは絶えず。よのつね、驚くほどの地震、二三十度震らぬ日はなし。十日・廿日すぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度・二三度、もしくは一日まぜ、二三日に一度など、おほかた、そのなごり三月ばかりや侍りけん。

○「地震」の収束状況の全文。数値をもって詳細に記している。

「三四」四大種の中に、水・火・風はつねに害をなせど、大地にいたりては、ことなる変をなさず。昔、斉衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほ、この旅にはしかずとぞ。すなはち、人みなあぢきなき事をのべて、いささか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし

後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。

○「地震」のまとめ全文。「あぢきなき」と評価している。

三(※第三章・人と住处とは)

「二四」すべて、世の中のありにくく、わが身と住处との、はかなく、あだなるさま、また、かくのごとし。いはんや、所により、身のほどにしたがひつつ、心をなやます事は、あげてかぞふべからず。

○第三章冒頭の全文。「すべて」という発語のことばから、また「かくのごとし。」に至るまで、作品冒頭と照応していて、「不思議」全体のまとめとしても考えられる。「いはんや」で、今度は「所により、身のほどにしたがひつつ、心をなやます事」に転じている。いわば、「二四」は前章までと、本章以降を鎖でつなぐ役目を果たしているものといえよう。

「二五」もし、おのれが身、数ならずして、権門のかたはらに在るものは、深くよろこぶ事あれども、大きに楽しむにあたはず。なげき切なる時も、声をあげて泣く事なし。(略)

○「二五」の段だけで独立した随筆と考えてもよいところ。対句を多用し、「いづれの所を占めて、いかなる業をしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。」でまとめている。

四(※第四章・自分の人生)

「二六」わが身、父方の祖母の家を伝へて、久しくかの所に住む。その後、縁かけて、身衰へ、しのぶかたがたしげかりしかど、つひにあととむる事を得ず。三十余りにして、さらに、わが心と、一つの庵を結ぶ。これがありすまひにならぶるに、十分が一なり。(略)

○第四章から、自分の生涯に触れていく。その冒頭部分。「三十余り」で、「二つの庵を結び、以前と比較し「十分が一」の家にすむことになったという。

「二七」すべて、あられぬ世を念じ過ぐしつつ、心を悩ませること、三十余年なり。その間、をりをりのたがひめに、おのづから、短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出で、世を背けり。(略)

○「すべて」という発語の言葉は、「二四」段にも存在した。「心を悩ませること」とあるのは「二四」段と照応している。また「五十」の春に出家したことを記し、さらに「大原山の雲に臥して、また、五かへりの春秋をなん経にける。」と記している。

「二八」ここに、六十の露消えがたに及びて、さらに、末葉の宿りを結べる事あり。いはば、旅人の一夜の宿を造り、老いたる蚕の繭を営むのごとし。これを、中ごろの住处に並ぶれば、また、百分が一

に及ばず。とかく言ふほどに、齢は歳歳にたかく、住処はをりをりに狭し。その家の有様、よのつねにも似ず。広さはわづかに方丈。

高さは七尺がうちなり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて、造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとに、かけがねを掛けたり。もし、心にはなほ事あらば、やすく他へ移さんがためなり。その、改め造る事、いくばくの煩ひがある。積むところ、わづかに二輛、車の力を報ふ外には、さらに他の用途いらず。

○「四（※第四章）」のまとめの全文。「ここに」を発語とし、終の住処を結んだことについて記す。それが「六十の露消えがた」であったこと、「百分が一」の小さな「方丈」の家で、しかも移動式住宅であったことを記す。

五（※第五章・今の自分）

「二九」いま、日野山の奥に、跡をかくして、後、東に三尺余りの庇をさして、柴折くぶるよすがとす。（略）

○第五章の冒頭部分。「いま」という発語の言葉から、「日野山」の奥に住んだことを記し、以下「方丈」の住処の内部の様子を記す。

「三〇」その所のさまをいば、南に掛樋あり。（略）

○「方丈」の住処のまわりの様子から、情景、さらに四季折々の生活の様子を記し、最後に「独り調べ、独り詠じて、みづから情を養ふばかりなり。」でまとめる。

りなり。」でまとめる。

「三一」また、ふもとに一つの柴の庵あり。すなはち、この山守が居る所なり。かしこに小童あり。時時来たりて、あひ訪ふ。もし、つれづれなる時は、これを友として、遊行す。（略）

○「ふもと」の「山守」に目を転じた部分。「小童」を取り上げているところが興味深い。さらに遠くの情景、また暇に任せて出歩く様子、夜の森閑とした庵の様子が描かれ、「いはんや、深く思ひ、深く知らん人の為には、これにしも限るべからず。」でまとめている。

「三二」おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに五年を経たり。仮の庵も、やや故郷となりて、軒に朽葉深く、土居に苔むせり。（略）

○「おほかた」という発語には注目したい。作者が本作品の趣旨をこの部分でまとめようという気持ちと評価してみたい。「あからさま」と思ったのに「今すでに五年を経たり」と記す。以下、遠く都の噂を記す。その噂とは、もちろん「無常」の噂である。そして「ただ、仮の庵のみのどけくして、おそれなし。」と記し、さらに「ただ、静かなるを望みとし、愁へ無きを楽しみとす。」とし、「世の人の住処を造るならひ」と比較している。

「三三」それ、人の友とあるものは、富めるを尊み、懇なるを先と

す。(略)

○「それ」という発語に始まるこの段は、友も家来も持たぬ自分を、「人を従へ、人を顧るよりやすし。」と肯定し、自分のことは自分ですることの気楽さと健全さを述べ、「人に交はらざれば、姿を恥づる悔いもなし。糧ともしければ、おろそかなる報をあまくす。すべて、かやうの楽しみ、富める人に対して、いふにはあらず。ただ、わが身一つにとりて、昔と今とをなぞらふるばかりなり。」と、最後に自分の昔と今とを比較して、まとめている。

「三三」おほかた、世をのがれ、身を捨てし恨みもなく、恐れもなくし。(略)

○この部分は「底本はじめ古本系の諸本になく、流布本系の諸本に存する。」(テキスト脚注)ということである。「おほかた」の使われ方に注目したい。結論で述べるが、「おほかた」を発語とするこの(「三三」)は存在するほうが、構成上都合がよい。

「三四」それ、三界はただ心一つなり。心、もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿・楼閣も望みなし。今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。(略)

○「それ」という発語に始まるこの段は、人間は心の持ちようがすべてだ、と言っている。以下、「魚」と「鳥」の例をたとえに挙げ、「閑居の気味も、また同じ。住まずして、誰かさたらん。」とまとめている。

六(※第六章・終わりに)

「三五」そもそも、一期の月影傾きて、余算の山の端に近し。(略)

○第六章冒頭は、「そもそも」という発語をもつ。この語にはとくに重い響きを感じられる。作品中もつとも思ひ発語の言葉と言つてよいだろう。以下、自分の生き方を反省し、「いかが、要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさん。」とまとめている。

「三六」静なる暁、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひて曰く、世をのがれて、山林にまじはるは、心を修めて、道を行はんとなり。しかるを、汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。住処はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは、僅かに周利槃特が行ひにだに及ばず。もしこれ、貧賤の報のみづから悩ますか。はたまた、妄心のいたりて、狂せるか。その時、心さらに答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申して、やみぬ。

○第六章中心となる全文。「このことわり」は前段の仏道への志をさす。自問自答し、「しかるを」以下で自己の生き方を否定しているかのようである。

「三七」時に、建暦の二年、弥生のつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これを記す。

○「時に」という発語で、年月日述べて本作品を終了させている。

三、概観から

全体をシンプルな概観し、その構成（構造）をビジュアルにしておく。

一（※第一章・序論）

「二」～「三」（※「人」と「住処」の無常）

○「人」と「住処」との無常を「水の泡」と「露」にたとえている。

二（※第二章・世の不思議）

「四」（※「世の不思議」の序文）

○作者自身が「世の不思議」を見たことを述べる。以下、具体例が記される。

「五」～「七」（※安元の大火）

○「安元の大火」を詳細に延べ、「住処」にこだわることを否定している。

「八」～「一〇」（※治承の辻風）

○「治承の辻風」を詳細に延べ、「もののさとしか」と述べる。この二番目の「不思議」から、「また」を使い、「不思議」の列举を意識している。

「一一」～「一四」（※治承の都遷り）

○冒頭、「また」で始まり、「都遷り」の悲惨な実態を赤裸々に描く。

「一五」～「二〇」（※養和の飢饉）

○冒頭、「また」で始まり、「飢饉」の悲惨な様子を詳細に描く。

「二一」～「二三」（※元暦の大地震）

○冒頭、「また」で始まり、「大地震」の悲惨な様子を詳細に描く。

三（※第三章・人と住処とは）

「二四」～「二五」（※心の苦悩は数知れず）

○「すべて」で始まり、「不思議」をまとめ、人の心の苦悩へと展開する。

四（※第四章・自分の人生）

「二六」（※凋落し庵に住む）

○自分の過去を振り返り、凋落の人生とする。

「二七」（※大原出家）

○「すべて」で始まり、大原山に出家。「心を悩ませること、三十余年なり。」とある。

「二八」（※方丈の住居）

○「ここに」で始まり、方丈の、移動式住宅の様子を詳細に描く。

五（※第五章・今の自分）

「二九」～「三一」（※方丈の日野山閑居）

○「いま」で始まり、方丈の住処の内部の様子から、周辺の様子、さらには方丈の住処の夜の森閑とした様子を記す。

「三二」（※都の無常と方丈の住処）

○「おほかた」で始まり、都の無常の噂を聞き、方丈の住居の安寧

さを肯定する。

「三三」(※独居の気楽さ)

○「それ」で始まり、独居の気楽さを記す。

「三四」(※心がすべて)

○「それ」で始まり、人間は物質ではなく、精神の満足さが重要と述べる。

六(※第六章・終わりに)

「三五」～「三六」(※自己の生き方の反省)

○「そもそも」で始まり、自己の生き方を反省する。「不請の阿弥陀仏、両三遍申して、やみぬ。」でまとめる。

「三七」(※後記)

○本書を記した二年月日、場所を記している。

以上、全体の構成(構造)である。※は土屋の命名。

四、結論

方丈記の構成とその趣旨につき、現時点で判明している(と考えられる)ことを記して、本稿の結論としてみたい。

構成を簡潔にまとめれば。

1、序文(世は無常)↓2、不思議(世の無常の具体例)↓3、人生の苦悩(一般論)↓4、自己の苦悩(個別論)↓5、出家1(大原)↓6、出家2(日野山・方丈の家)↓7、方丈の住処(内部・周辺・

近辺・遠地・独夜)↓8、独居の気楽さ(都との比較)↓9、自己の生き方の反省↓10、後記

と、10項目に分けられる(仮に、一案としてだが)。そして、『方丈記』の『方丈記』たる所以は、6から始まる。日野山での方丈の住処を自己の安住の地とした部分から、長明が真に主張したかった内容が述べられている。

構成上の一つのポイントは、世の「不思議」(2)から、自己の苦悩(3～4)へと展開する部分である。この展開はやや強引といえよう。が、見方を変えれば、「不思議」から、直接、方丈の住処の安寧さを述べるよりも、彼の、人生における鬱々たる心の暗闇が、3の「人生の苦悩」(一般論)と4の「自己の苦悩(個別論)」により、より深化されているともいえる。5の「出家1」は世の中の「不思議(天変地異)」だけで成しえたものではないということの強い内面の噴出と見られよう。6の「出家2」により、やっと安住の家「方丈の住処」を手に入れたのである。7で「方丈の住処」の内部、外部、周辺から近辺さらに遠地までをとことん賛美する。異常なほどのめりこみ方ともいえる。

しかし、彼の本領はおそらく「三三」の「おほかた」から始まる部分であろう。「三三」の「それ」の強い語調から始まる部分とセットになり、昔の自分を今の自分と比較しているのである。ここには、彼のやるせない自己弁護が強く漂っているように感じられる。

続いて(「三三」)の「おほかた」から始まる段と「三四」の「それ」から始まる段とがセットになり、「物よりも心」を強調しているが、負け

惜しみと感じられるのは「ひがよみ」であろうか。

「三五」以下三段は本書のまとめにあたるが、すべてを「後記（後がき）」としてもよいようなところである。

鴨長明は『方丈記』で何を主張したかったのか。全体の構成から、「三二」（「おほかた」で始まる段）と「三三」（「それ」で始まる段）で、今の清貧（あえて「貧しい」とはいわない）の住処をよしとし、独居の生活をよしとする、これが一つの主張。

そして、「三三」（「おほかた」で始まる段）で、今の純粹な心をのべ、「三四」（「それ」で始まる段）で、精神の満足こそ最善であると強調する、これが最終的な主張。

彼が実際にどのように悟っていたかどうかは定かではない。おそらく、物質的執着心が強かったであろう彼が、唯心論を信じ込むことだけが救われる道だったのではないかと、考えられる。

本稿は、あくまでも『方丈記』研究の「序章」であるから、これ以上深く立ち入ることはしないが、「三五」以下に、彼の本当の自分というものが隠されているというように思われてならないのである。

